登場人物

殿山　潤一（とのやま　じゅんいち）

ＤＫ。帰宅部。筋トレが趣味。

平常時 5.3 センチ、勃起時 13.4 センチの仮性包茎チンポ。童貞。

父親である圭一郎のパソコンを無断借用してエロ動画オナニーをしているところを盗撮され、性奴隷管理委員会に脅迫される。

性奴隷管理委員会（せいどれいかんりいいんかい）

正体不明の組織。

性欲の健全な消費を目的とし、放埒な性欲の持ち主を性奴隷として管理することで社会の安定を図る組織であると自称する。

潤一の弱みに付け込んで性奴隷として調教する。

第一話

夜の十時を過ぎた頃、殿山潤一（とのやま　じゅんいち）は自室を出て、父親である圭一郎の部屋の戸を開けた。
夜勤に出ている圭一郎は当然のことだが、部屋にはいない。
潤一は圭一郎の机に座ると、パソコンのスイッチを入れた。
手慣れた様子だが、圭一郎の許可を得てのことではない。
潤一は、無断で圭一郎のパソコンを操作しているのだ。
潤一は父親のパソコンのパスワードを入力し、ブラウザを起動する。
そして、暗記したウェブアドレスを入力し、エンターキーを押した。
潤一はごくりと唾を飲み込んだ。
何度もしていることなのに、胸の奥が高揚するのだ。
パソコンのディスプレイには、無断アップロードされたエロ動画のサムネイルが並んでいる。
潤一は慣れた様子でサムネイルをクリックし、お気に入りのエロ動画を再生する。
画面の中では好きな同級生に似ている女優エイコがブラウスだけを羽織った姿でマ〇コを弄っていた。
潤一はスウェットを脱ぐと全裸になった。
ＤＫの平均よりも筋肉の厚みのある身体は潤一の趣味である筋力トレーニングによって鍛えられたものだ。
体毛は薄く、顔がハンサムであったのならば女性雑誌の表紙を飾れたに違いない均整の取れた身体をしている。
だが、潤一のチンポは人並みであった。
仮性包茎で、大きすぎることもなければ小さすぎることもなく、目立つ特徴のない、モブチンポ。
己の人生をその他大勢だと思っている潤一には相応しいチンポと言えた。
潤一はチンポを扱きながら、エイコの痴態を見つめる。
「ああ……チンポ突っ込みたい……」
潤一はチンポを扱きながら浅ましい言葉を口にした。
だが、それは性への興味が芽生え、性欲が日に日に高まるＤＫならば当然ともいえることであった。
潤一の手の中でチンポが徐々に大きくなる。
陰茎が膨らみ、亀頭も少し大きくなる。
潤一は情欲に潤んだ目でチンポを扱き続ける。
重ねての指摘だが、この部屋は潤一の部屋ではない。
潤一の父親である圭一郎の部屋だ。
夜勤で部屋を留守にしている圭一郎が潤一の行動を知ったのならば激怒し、部屋に鍵をつけることを検討するのは当然のことながら予想されることであった。
潤一がそのような危険を冒してまで圭一郎のパソコンを使っているのには理由がある。
潤一のスマートフォンはチャイルドロックが施されているだ。

だから、年齢制限が掛けられたサイトや有害指定されているサイトにはアクセスできないのだ。
潤一とて、悪いことだと知っている。
けれど、エロ動画を見たいという欲求の前にはその罪悪感はあまりにも小さかった。
だから、圭一郎のパソコンのパスワードに当たりをつけ、案の定であった誕生日を元にパソコンを起動することに成功し、こうして父親の部屋でオナニーをするようになったのだ。
ディスプレイの中ではエイコがディルドをマ〇コに挿入して、オナニーをしている。
「俺もオナニーをしているよ……」
潤一の手の中でチンポが完全に勃起をした。
潤一は包皮を剥くと、掌に唾を垂らした。
そして、むき出しになった亀頭を掌でぐりぐりと刺激する。
「あ……おあっ……くうぅ……」
敏感な亀頭への刺激に潤一は身悶えした。
筋肉質なＤＫの全裸オナニーだ。
こんな姿を圭一郎に見られたら、と思うと潤一はぞっとする。
潤一は過去に、圭一郎が夜勤に出勤してからすぐにエロ動画オナニーをしようとしたことがある。
その時、圭一郎が忘れ物をしたというので慌ててスウェットの下だけを穿いて圭一郎の部屋から飛び出したのだ。
それ以来、潤一は夜の十時頃にエロ動画オナニーをすることにしたのだ。
潤一は掌で己の亀頭を可愛がる。
ディスプレイの中ではエイコがディルドでマ〇コを可愛がる。
「あ……イくう……イくううう！」
潤一は声を荒げ、亀頭を掌でぐいっと抑えた。
潤一の全身が震え、亀頭を抑えた手の隙間からザーメンが溢れる。
潤一は快楽に蕩けた顔で、長く息を吐いた。
悪いことだとは分かっている。
けれど、止められない。
エロ動画オナニーは潤一の人生の一部なのだ。
潤一はティッシュで己のザーメンを拭うと、あらかじめ用意していたビニール袋にザーメンティッシュを捨てた。
そして、圭一郎のパソコンを操作し、ブラウザの履歴を削除してからブラウザを落とす。
「あーああ、俺もパソコン欲しいなあ」
潤一はぼやいた。
圭一郎のパソコンのパスワード管理の雑さから分かるように、パソコンの知識は潤一の方がある。
だから、自分のパソコンさえあれば、潤一はいつでもエロ動画サイトにアクセスできるのだ。
そうすれば、圭一郎の夜勤を待たずともエロ動画オナニーができる。
けれど……親の金で契約しているスマートフォンと違い、パソコンはＤＫが買うのは高

価だ。
　オンライン授業もスマートフォンで事足りるため、パソコンを買う必要性がない。
　つまり、圭一郎にねだるには高すぎる買い物なのだ。
　だから、潤一は圭一郎のパソコンを無断借用してエロ動画オナニーをするしかないのだ。
　潤一はため息をついた。
　潤一の股間では、すっかり萎えたチンポがくたっとしている。
　いつもはエロ動画オナニーを一回で済ませている。
　だが、今日はどうしてか、名残惜しく思えた。
　だから、潤一はもう一度ブラウザを起動した。
「え？」
　潤一は驚いた。
　圭一郎のパソコンのブラウザのホームは、有名な検索サイトのトップページになっている。
　だから、ブラウザを起動したのならば、あのページが表示されるはずなのだ。
　それなのに、ブラウザにはあのページが表示されていないのだ。
　ブラウザには「性奴隷管理委員会」と表示されていた。
　潤一が聞いたこともない単語だ。
　潤一は、エロ動画の一種だろうかと思った。
　それぐらい、性奴隷という単語は潤一の日常と馴染みがなかったのだ。
　潤一は、エロ動画サイトの履歴を消し忘れたのかと思って履歴を開こうとした。
　だが、カーソルが動かない。
　そして、性奴隷管理委員会と表示されたページが勝手にスクロールし始めた。
　ブラウザにメッセージが現れる。

　殿山純一へ
　我々は性奴隷管理委員会です。
　性奴隷管理委員会は性欲の健全な消費を目的とし、放埒な性欲の持ち主を性奴隷として管理することで社会の安定を図る組織です。

「なんだよ、これ……」
　潤一は表示されたメッセージを冗談だと思い込もうとした。
　だが、潤一のパソコンに関する知識が冗談ではないと否定をする。
　まず、操作もしていないのに勝手にメッセージが表示されるのがおかしい。
　それから、パソコンの操作者が潤一であると特定されているのもおかしい。
　潤一は己の個人情報を圭一郎のパソコンで入力したことはない。
　エロ動画を閲覧するために個人情報を入力したら不味いことになることぐらい知っているのだ。
　だというのに、このメッセージの送り主は、今、圭一郎のパソコンを操作しているのが潤一だと指摘をしている。
　コンピュータウィルスではなく、クラッキングだろう。

潤一は慌ててパソコンの電源ボタンを長押しした。
だが、どれだけ押し続けてもパソコンの電源が落ちない。
ブラウザにはメッセージが表示され続ける。

殿山潤一は父親である殿山圭一郎のパソコンを無断借用し、エロ動画オナニーに耽るエロ猿です。
その性の放埒さは目に余るものがあり、性奴隷管理委員会としては無駄遣いされている性を有意義に活用するために、殿山純一を管理することと決定しました。
殿山純一は今後、管理番号DK1083として我々の管理下に置かれます。
管理番号DK1083には以下の義務が課せられます。
一つ、性奴隷管理委員会が支給するスマートフォンを法令に違反しない範囲で身に着けること。
一つ、性奴隷管理委員会の指示に従うこと。
一つ、性奴隷管理委員会の指示なく射精をしないこと。
一つ、性奴隷管理委員会を特定しようとしないこと。
これらの義務を遵守する限り、管理番号DK1083の社会生活を保障します。

「なんだよ……これ……」
潤一は背筋が凍りついたかのような恐ろしさに身震いをした。
己の人生が予想もしない方向に転がり落ちている予感に潤一は呼吸もままならない。
けれどまだ、潤一はこれが悪質ないたずらではないかと思い込もうとした。
だが、メッセージのあとに再生された動画を見て、潤一は哀れな思い込みを打ち砕かれた。
そこには潤一の姿が映されていた。
潤一がモブチンポを扱いて、いやらしい顔をしながら全裸でオナニーをしている姿だ。
潤一は己の全裸オナニー姿を盗撮されている恐怖と嫌悪感にぞっとした。
潤一は汚らわしい動画を止めることもできず、目を逸らすこともできない。
ピンポーン。
午後十時過ぎであるにもかかわらず、玄関のインターホンが鳴った。
潤一は誰でもいいから人に会いたくて、慌ててスウェットを着て二階から駆け下りた。
父親である圭一郎か、宅配便の配送か。
誰でもいいから人に会いたかったのだ。
潤一は玄関のドアを開けた。
玄関先には誰もいなかった。
悪戯だろうかと思いながら周囲を見回した潤一は足元に箱が置かれていることに気が付いた。
表には「管理番号DK1083へ」と書かれている。
性奴隷管理委員会か。
潤一は慌てて玄関から外に出て、周囲の道路を見回した。
だが、深夜の住宅街に人気はなく、箱を置いた人物の姿も見当たらなかった。
悪意のある人物がいるにもかかわらず、その姿を見ることもできない。

その状況に、潤一は震えた。
このまま、あの箱を処分してしまえば日常に戻れるかもしれない。
けれど……けれど、性奴隷管理委員会には潤一の全裸オナニー動画が残されている。
あれを流布されたら潤一の人生は終わってしまう。
潤一は震える手で箱を開けた。
中には黒いスマートフォンが入っていた。
黒いスマートフォンが振動した。
潤一は震える手でスマートフォンを操作した。
メールには性奴隷管理委員会からの命令が記されていた。
「チン毛を剃り、無毛チンポを学生証と共に撮影し、指定されたアドレスに送信しなさい」
これまで、己をその他大勢のモブに過ぎないと思っていた潤一にとって、性奴隷管理委員会からの命令は許容範囲を超えていた。
己の人生が転がり落ちていく恐怖を強く覚えた。
潤一は誰かに助けてほしかった。
けれど、誰に相談しろというのか。
父親である圭一郎に話せば、パソコンの無断使用がバレてしまう。
警察に相談をしても、圭一郎のパソコンを使ったことがバレてしまう。
そもそも、己の全裸オナニー動画の話をどんな顔をして大人に話せばいいのか。
大人には話せない。
ましてや、同級生たちもこんな問題では頼りにならない。
潤一は孤独であった。
その他大勢という枠から零れ落ちたことを強く実感した。
潤一は黒いスマートフォンを持って家に戻った。
そして、洗面所に向かうとスウェットの下を脱ぎ、モブチンポを露わにした。
潤一の股間に茂る大人の証であるチン毛。
生えていて当然のものであり、特に感慨もないものであったが、これから剃り落とすのだと思うと悲しみがこみ上げてくる。
潤一は剃刀を取り出し、シェービングクリームをチン毛に塗った。
そして、無心にチン毛を剃り落としていく。
剃刀が滑るたび、潤一のチン毛が消えていく。
潤一の平和な日常が消えていく。
潤一はチン毛を全て剃り落とすと絞ったタオルで下腹部を拭った。
精通前の子どものような無毛チンポが露わになり、潤一は情けなく思った。
そのまま自撮りをしようとして、学生証も一緒に撮影しないといけないことを思い出す。
潤一はそのままモブチンポを丸出しで自室まで戻ろうとした。
これまでの潤一だったのならば、家に一人なのだから、そのことに疑問を抱くことはなかっただろう。
だが、潤一はスウェットを穿いた。
この家には潤一しかいないのに、どこにいるかも分からない性奴隷管理委員会のおぞましい目線を感じて、チンポを隠したのだ。

これから、無毛モブチンポを自撮りするというのにささやかな抵抗であった。
潤一は自室で学生証を取り出すと、再びスウェットの下を脱いだ。
そして、かつてチン毛が生えていた場所に学生証をかざし、黒のスマートフォンで己の情けない姿を収める。
カシャ……
スマートフォンのシャッター音が部屋に響いた。
それは、潤一の性奴隷生活の始まりを告げる無慈悲な宣告でもあった。

奥付

『編集版　性〇隷管理委員会　永牢の潤一』より「第一話」

発行：2023年6月28日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsiteがるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep